

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	「服汚され文」の二義性を生む機構：項相互間・項動詞間の意味論的距離
Author(s)	田原, 薫
Citation	ニダバ, 21 : 1 - 10
Issue Date	1992-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047225
Right	
Relation	



「服汚され文」の二義性を生む機構

— 項 相 互 間 ・ 項 動 詞 間 の 意 味 論 的 距 離 —

田 原 薫

0. 序説

本論考で扱う「服汚され文」というのはいわゆる間接受動文の一種であり、典型的には「母親が娘に服を汚された」という形の文である。この形の文は、《娘が母親の服を汚して、そのことで母親が迷惑した》という事態と《娘が自分の服を汚して、そのことで母親が迷惑した》という事態の、どちらをも表わすことができる。前者の場合、汚した張本人の言及を省略して「母親が服を汚された」ということができるが、後者の場合は張本人の表現「娘に」を省略することができない。後者はちょうど自動詞からの間接受動文「母親が娘に死なれた」において「娘に」が不可欠であり、「母親が死なれた」とは言えないことと並行している。このような差を生じる理由は、もちろんG B理論など句構造主義の文法でもこじつけの説明はできなくはない〔恐らく束縛理論(Binding theory)の枝理論に属する所有者束縛(Possessor Binding)というような概念を使う〕が、上述の意味の差は、実は能動文「娘が服を汚した」にもまったく同様に内包されているものである。すなわち娘が他人の服を汚したのか、自分の服を汚したのか、という潜在的な差である。日本語ではこのような文の場合、目的語「服」はG B理論で言う完全規定されたいわゆるNPとは言い切れない面があり、外部から侵入する「所有者束縛」に対してオープンであり、その作用を受け入れて初めて誰の服であるかが確定し、その段階でようやくNPとなる。恐らくこういう説明が句構造系の文法の説明であろう。そこでは「服」の指示対象の違いは所有者束縛の源泉(束縛子, Binder)の違いに帰せられ、句構造式の骨格そのものは同一あるいは共通であると見なされるであろう。このように、「服汚され文」に対応する能動文(「服汚し文」とでもいうべきか)に一つの構造式しか与えることができない句構造主義の理論では、「服汚され文」そのものが選択的に二つの意味機能をもち、その選択値によって能動者表現が省略できたり／不可欠であったりする統語法上の差がうまく説明できないであろう。しかし私が提唱する理論的枠組では、張本人がどちらの人物の服を汚したのかに応じて別々の構造を指定することができる。その枠組は意味論先行型の統語論的枠組であるから、意味を異にする「服汚され文」或いは「服汚し文」の変種には異なった構造を与え、同じ事態を表現する「服汚され文」と「服汚し文」の対には同一の基底構造を与え

ている。相異なる基底構造の一つ一つからそれぞれの「服汚し文」と「服汚され文」が生ずるのである。その構図では、「服汚され文」の二義性は結局、主語（被迷惑者）と能動者（張本人）との意味的位置関係、さらにはそれらの項と動詞および目的語との意味的距離の差にかかっている。この機構を説明することによって、副産物として、句構造主義の限界と、対照的に複数次元を使った意味論的統語論の優越性〔従って今後における必要性〕とを立証することもできる。

1. 位相論的統語観の枠組

意味構築作用或いは認識の領域と統語形式の領域が相互作用するというのが言語の実態であるならば、まさにその実態を捉えることに集中した研究領域を言語学はもたねばならないが、そのような研究領域がもつ望ましい性質として次のようなことが考えられる。

①. どの言語でも統語形式は不連続で粗い網の目しか具えていないが、意味論的な領域では、連続的に、或いは少なくとも僅差・多段階的に要素が分布している。たとえば他動詞と目的語或いは主語との関係にしても、動詞ごとに、さらには動詞の実際の用法ごとに〔たとえば本論で例に取り上げるように、「汚す」にしても、本人の衣服を汚すのか、他人の衣服を汚すのかという別〕意味関係は変異する。従って、意味の表示は‘analog’な変異にも対応できることが望ましく、それには或る種の空間的写像が推奨される。そして、そこから統語形式に写像する際に初めて‘digital’化するような体系を、文法はもつべきである。

②. 意味論・統語論・語用論を通底して可能ならしめているのは語彙である。語彙は従来の文法では最初から既与のものと思なされてきた。しかし語彙体系の習得は統語法の習得と無関係に進展するのではない。他動詞の習得なくして他動詞構文の習得はあり得ないが、その論理的優先順位のみで固執するのはバランスを欠く。逆もまた真であり、他動詞構文（用の枠）の習得なくして他動詞の習得はあり得ない。従って、良い文法は、語彙の獲得と統語法の獲得を相互依存的に同時に進行するものと見なして、同一の枠組で両者を説明できるような文法である。

筆者の提唱による「位相論的統語観」(Topological View of Syntax)或いは複数次元選択素性統語論(Pluridimensional Paradigmatic Syntax)というのは、上述のような思想に基づく意味論先行型の統語論である。命名についてすこし注解すると、節文の十全な意味論的分析にはいくつの独立変数を立てればよいのか、当面よくわからないが、あまり大きな数(multi-)にはならないだろう、という見通しのもとに「複(pluri-)」の名が選ばれた。少なくとも3次元は必要であるから、当面は「複」を「三(tri-)」と読み替えておいてさしつかえない。‘paradigmatic’というのは、要素が各次元において二値的な素性のどちらかを選択的に身に着ける、という意味。また「位相論的(topological)」というのは、位相数学(位相幾何学, topology)とは密接な関係はないが、日本語と英語の使役構文の

構造差などにすこし関係してくるので、関連する名称として選ばれた。この方法論は拙論（『言語研究』第90号(1986), p27-47）で提示されたものであるが、それは以後の発展のための基本的な骨格と考えるべきものであって、実際たとえば間接受動文の分析のためなどに、基本的な8個の点以外の意味論的・統語論的地位が必要になってくる。しかしまず基本としては次に述べる8個の点で写像される文法機能を設定する。

位相論的統語観では（節文の直接構成成分の）文法機能を交わりによって作り出すために、次のような3組の2項対立をなす機能素性を設定する。

- ①-1「名詞的」：生起或いは存在する事物を表わし、指示を受けることができる。
- ①-2「動態的」：生起或いは存在する事態を表わし、否定を受けることができる。
- ②-1「状況的」：事態が具体的に生起する際の個別的な状況・条件を表わす。
- ②-2「内容的」：具体的に生起する事態の事例からその共通の内容を抽出して、より一般的に描出する。
- ③-1「過程的」：事態が或る結果或いは帰結に到達するまでに經由する、時間的或いは論理的過程を表わす。
- ③-2「結果的」：事態が或る時間的或いは論理的過程を經由して到達した結果或いは帰結を表わすほか、まだ因果関係の解釈を受けない中立的な事実認定をも表わす。〔以上は田原(1986)による〕

上記の機能素性は節文の成分が分担して果たすべき元素的機能として直観的に首肯できるものであろう。今から見ると舌足らずの点があり、定義を改善したい気もするが、理由の説明が煩瑣になるので、従来そのままの形で挙げた。これらの交わりが各々《文法機能》に該当する。これらの機能素性を「名・動・状・内・過・結」と略記し、その組み合わせからできる文法機能を次のように名づけることにする。また座標点として見た場合の記号は右に挙げる。

[動, 状, 結] ……叙動詞, <i>A</i>	[動, 内, 過] ……動態語, <i>V</i>
[名, 状, 結] ……状況語, <i>P</i>	[名, 内, 過] ……斜格語, <i>R</i>
[名, 状, 過] ……直格語, <i>S</i>	[名, 内, 結] ……対置語, <i>O</i>
[動, 状, 過] ……補直語, <i>Q</i>	[動, 内, 結] ……補対語, <i>C</i>

以上8個の交点のうちで、時制と法性を担って陳述の要の役を果たすのが*A*に位置する「叙動詞」であるが、これは基本的には繫辞(copula)であり、現実に現れるものはそれが色々に修飾されたものと解釈できる。ただし*A*位置に入るのは叙動詞だけではない。*P*位置に名詞句が入れば、それを項とする述語が暫定的に*A*位置に入ることができるので、それも考慮しておかねばならない。また、直格語は〔名詞的, 状況的, 過程的〕な成分であるが、意味論的構造（「統意構造」と呼ぶ）と統語論的構造との間で〔過程的〕をめぐる

意味合いの差がある。意味論的構造においては文字通り定義③-1の意味であるが、統語論的構造においては「過程的」はもっと主観的・心理的なものであってもよい。すなわち或る視点に立ち、或る名詞句を意識の中心に据えれば、或る論理的帰結が出てくる、という意味での主観的な心の過程を表わすように流用されてもよい。従って直格語はいわば節文内で弱く話題化されたものである。これが日本語や英語などの「主語」(FSUG〔文獻欄〔4〕〕の「軸語(pivot)」)の地位を占めることは頷けるところであろう。

さて、以上に示した文法機能の位置にそれぞれ適切な語句が配当されて、節文の意味論的構造ができるが、理想的にはそれがそのまま統語論的構造に対応すべきである。しかし、発話主体の主観的・心理的要因が働いて、意味論的構造(における要素の地位)から統語論的構造(における当該要素の地位)への厳格な1対1写像は必ずしも成立しないので、両者の構造のずれを「転送」という方便によって説明している。この問題に深入りする余裕はないが、ただ次の考えだけはテーゼとして掲げておかねばならない。すなわち《節文の意味論的(統意)構造では直格語の位置は空いており、そこに同一構造の他の位置から、或いは例外的には別の構造体から、直格語の候補が転送・入居して充填され、節文の統語論的構造ができる》ということ、平たく言えば「主語は後天的に選ばれて作られるもの」ということを作業仮説とするのである。

位相論的統語観は、所謂「非構造式型言語」をもカバーしようとする理論として当然のことながら、語句の集合作りを主目的としていない。肝要なことは「動詞句」という集合の存在を経験則として主張することではなく、それがなぜ現実の言語に高頻度で生起するのか、また何を規準として結束した集合なのか、という疑問に対して論理的・演繹的に裏づけを与えることである。そうしておけば「動詞句」に相当する集合はどんなタイプの言語においても、必要に応じて認知することができる。すなわち素性〔内容的〕を規準として共通にもつ語句という形で、動態語・斜格語・対置語・補対語から成る集合を、根拠づけられた自然類として検索・抽出することができる。上記四成分の典型的な事例はそれぞれ他動詞・斜格項(間接目的語を含む)・直接目的語・「目的補語」である。しかしこの集合作りが排他的・特権的なものではない。たとえばV成分たる動詞は〔動態的〕を規準として{V, Q, A, C}という自然類を組むこともできるし、〔過程的〕を共有する{V, R, S, Q}でまとまってもよい。句構造文法では或る元が一旦或る集合に属したら、直系上位集合以外の別の集合に属することはできないが、位相論的統語観ではどの(文法機能を担う)成分も最低三つの集合に重複所属している。要するに、relevantな規準を検索鍵(sorting key)として入力すれば必要な集合がすぐ検索抽出できるような体制を文法は具えていればよいのであって、英語のように、動詞句という単位が常に顕在的に立ち現れている必要はないのである。英語の動詞句のような顕在化した単位が或る統語現象の説明のためにぜひ必要だ、という事態が生じたら、その時に及んで「階層・順序づけ規則」を導入して処理すればよい。それがなくても言えることは沢山ある筈である。

2. 間接受動文の位相論的構造

図1

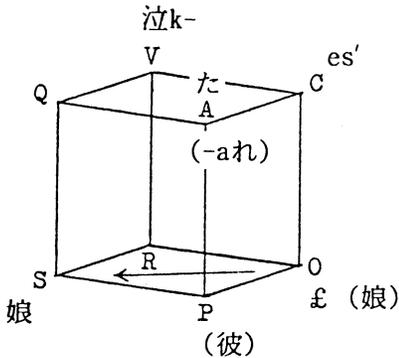
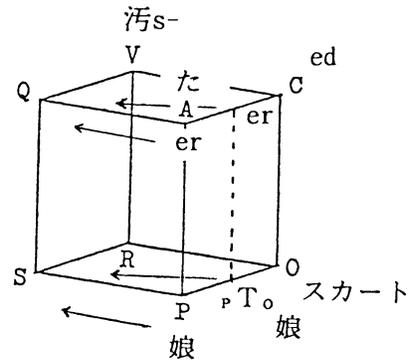


図2



- (1) 娘が泣いた
- (2) 娘がスカートを汚した
- (3) 娘によってスカートの汚された
- (4) 彼は娘に泣かれた

図1は文例(1)と(4)に、また図2は文例(2)と(3)に対応する位相論的構造である。位相論的構造と言っても、より論理的な構造に近い「統意構造」と、それから派生した、より表面に近い「統語構造」とが考えられるが、ここでは矢印を使って両者を兼ねて表わしている。図でAPOCVRSQの各頂点は前章で挙げたそれぞれ文法機能を表わす。図1で£の記号は「平衡子」という無形の要素で、OからSへ転居した項のいわば痕跡のようなもの、またes'は論理上の資格述語でこれもまた無形であるが、それらの説明は以下で述べる。図2のer, edも資格述語であるが、こちらは語彙的な資格述語である。

さて、泣くという行動は制御可能とも制御不可能とも一概に言えないから、その唯一項たる娘は「実行者(effector)」とも「被態者(patient)」とも一概に決められない〔これらの用語についてはFSUGを参照されたい〕。また人間は通常好んで泣くことはないであろうが、時にはカタルシスのために、意図的に抑制を解いて泣くこともあるであろう。その場合は、泣く人は動作主(agent)である。このように、自動詞の唯一項については資格述語が能動者(er)か受動者(ed)か決めにくい場合があるので、便宜的に資格述語をes'と表わすことにする。この記号に論理述語の印し(')がついているのは、これが入ったCの位置において、単に動詞「泣く」に対してその唯一項である「娘」を指示するだけの機能を果たす論理述語だからである。それに対して「語彙的資格述語」であるerとedの方は、それぞれの相棒たる名詞句が能動者/受動者であるという情報を表わす。他動詞は通常(少なくとも)二つの必須項を取るのので、どの項がどちらの相対役割を担うのか、を明示しておかねばならない。能動者が直格語の地位を占めれば能動態、受動者が直格語の地位を占めれば受動態、というように、態の決定に関与してくるので、それらの資格述

語を「語彙的」と呼ぶのである。それらの述語は常にその項とペアを組んで移動する。

図1で、 es' とペアを作ってもともと O 位置に生じた娘は、統語構造になった段階で S に転送されており、跡に痕跡のような平衡子(equilibrator) \mathfrak{E} を残している。これにはいま詳しく触れる余裕がない。ただ、これは述語と論理項のペアがやむなく崩れた場合のみに、論理項の跡に置かれるものと理解されたい。変形文法で痕跡を置くのは主として θ 役割確保のためであるが、項-資格述語のペアで θ 役割を保證するわが文法ではその必要がなく、項と述語がペアになって移動した跡は、両方ともすっかり空白になるのであって、この際は「痕跡」や \mathfrak{E} は残らず、新たに別のペアを収容するのに使ってよいのである。資格述語が単に論理的な es' の場合は、それと組む唯一項は語彙的には単独であるから、いわば単身赴任として移動し、その跡に痕跡状の \mathfrak{E} を残す。

図1にはまた、(4)の構築に必要な成分彼--あれのペアが $P-A$ の位置対に〔()に入れて〕置かれている。もしこのペアが $S-Q$ に転送入居すれば(4)を派生する。

図2は別の興味深い問題を提供している。「娘がスカートを汚した」といっても、他人のスカートを汚した場合と、自分のスカートを汚した場合がある。前者の場合が典型的な業績他動詞の意味論に対応するが、後者の場合は広義の再帰動詞、すなわち動作の影響が動作の主体に跳ね返って、主体は実行者あるいは動作主でありながら同時に被態者の性格も具えることになる。統意構造において受動者スカートを O に入り、前者の能動者娘が P に入るとすれば、後者の(半ば受動者の性格をもった)能動者娘は P と O の midpoint、 ${}_P T_O$ と記号する位置を占めると考えてよいであろう。それと組む資格述語も従って A と C の midpoint ${}_A T_C$ に入ると見なされる。この後者の場合、娘の位置する ${}_P T_O$ はスカートの位置する O に最も近く、しかも[状況的]に寄った側にあるので、娘は最も高い確率でスカートに対して実例指定作用をする、と考えられる。つまりスカートが「娘のスカート」と解釈されるようになるということである。

これに対して娘が P に位置する前者の場合は、スカートへの実例指定作用においては無標的であるが、後者との縄張り争いにおいて不戦勝となり、いわば 'default' 値として、高い確率で他人のスカートを指すことになるろう。

以上で見てきたように、他動詞構文が両義的である場合があり、各々異なった統意構造が措定されるが、統語構造ではともに娘- er の対結が $S-Q$ に転送入居して、同じ構造となる。従って表層構造(音声構造)も同一となる。しかし、それぞれの場合の「主語」の発祥の地が違うにつれて、他動詞(汚す)も目的語(スカート)も同じであるのに、節文全体のもつ他動詞性が異なる。この事実は、次章で見る間接受動文の性格に決定的な影響を及ぼす。能動文では中和されて蔭に潜んでいた性格の差が、間接受動文では統語現象の差となって明瞭に顕在化する事例が見られるのである。

さきの文例(3)は直接受動文であり、この意味も対応する能動文(2)と同様曖昧であるが、スカートが他人のスカートと解釈される確率が能動文の場合よりも向上するであろう。

《着衣が着用者によって汚された》という語法は日本語的でなく、疑似西欧語的である。受動文の産出にあたってはスカート - ed のペアが S-Q に転送入居し、能動者たる娘は生起した位置に残置されるが、格標示はどちらも同じであるから、表層構造からは見分け（聞き分け）ができない。しかしこれらの、異なる位置にあることが見分けにくい能動者の項も、間接受動文に組み込まれると、違いがわかるようになってくる。そこで次章は間接受動文を考えてみよう。

3. 間接受動文における他動詞性の二次的分化

考察下の状況によって迷惑を受ける人が場面に加わった場合に、その人に empathy を置いて事柄を陳述する構文が日本語にはある。いわゆる間接受動文がそれで、大抵は主人公が迷惑を受けるので「迷惑の受け身」などとも呼ばれるが、「太郎は先生に息子を誉められた」というような逆の場合もある。そこで、一般に間接受動文と呼ぶことにする。次の文例を考察してみよう。

- (4) 彼は娘に泣かれた〔再掲〕
- (5) 彼は（幼い）娘にスカートを汚された
- (6) 由紀子が坊やにおむつを汚された
- (7) 由紀子が坊やにスカートを汚された
- (8) 由紀子が亜由美にスカートを汚された〔亜由美は由紀子の幼い娘、とする〕
- (9) 由紀子がスカートを汚された

(4) は自動詞（泣く）からの間接受動文であり、意味は一義的、すなわち《娘が泣いたことによって彼が迷惑した》ということである。(5) は(4) と並行的であり、《娘が（自分の）スカートを汚したことによって彼が迷惑した》という意味。この場合は、男性はスカートを穿かないという文化知識によって、彼のスカートという解釈が排除される。すなわちスカートは娘のスカートである。(6) の表わす意味関係も同様で、おむつは通常幼児と結びつくから、意味はまず一義的である。ところが(7) となると見かけ上(6) と同型であるにも拘らず、スカートは幼くても男性たる坊やとは連合せず、女性たる由紀子と連合し、即座に(6) とは異なった解釈の回路が稼働する。その切り替えは極めて速く、とてもチョムスキー流の言語観に沿って行なわれているとは信じられない。すなわち D 構造から S 構造を作り、それからさらに LF（論理形式）を作って、その出力を意味解釈部門に入力して文の意味を理解し、それを世界の知識〔たとえばスカートは女性専用であるとか〕と照合して、ようやく適格とか・おかしいとか判断し、おかしければまた別の句構造を D 構造から作り直して同じ操作を繰り返してみる、といった言語観である。ところで(8) は曖昧である。登場人物が両方とも女性なので、(5)(6) のように《亜由美が（自分の）スカートを汚したことによって（多分その母親である）由紀子が迷惑を受けた》とも考えられるが、実は(7) のように《亜由美が由紀子のスカートを汚して、それで由紀子が困惑した》

という状況かもしれない。後者であるとするれば、やはり真に他動詞らしい他動詞（汚す）の用法に出くわしたことになる。この用法の特徴として、能動者の表現が省略可能である、ということが挙げられる。すなわち(9)のように能動者表現がなければ、文は義務的に後者に相当する意味に、すなわちスカートは由紀子のスカートを指すように解釈されるのである。この、能動者の省略可能性において(9)の型の間接受動文は直接受動文（たとえば「由紀子のスカートが汚された」）と並行している。

自動詞からと、広義の再帰動詞からの間接受動文では能動者（或いは張本人）の表現が不可欠であると言ったが、実は単に不可欠であるに留まらず、必ず「に格」によって格標示されねばならない、という条件がある。すなわち意味的な格助詞である「によって」や「から」はこの場合使えないのである。たとえば

(10)由紀子が亜由美によってスカートを汚された

(11)由紀子が亜由美からスカートを汚された

このような文では、スカートは義務的に由紀子のスカートと解され、汚すは他者に直接影響を及ぼす「真正他動詞」と解される。また語順の面での制約もある。

(12)由紀子がスカートを亜由美に汚された

ここでもスカートが亜由美自身のもものと解釈されることはない。このことは対応する能動文「スカートを亜由美が汚した」の解釈の可能性と並行している。

以上挙げた間接受動文の二義性が生ずる機構は、(2)の能動文の二義性、それにやや低い程度ではあるが(3)の直接受動文にもある二義性の機構と同じものである。そこで、図1、図2に倣って、位相論的統語観による各成分の文意形成機能と、文意全体の形を立体表示によって解析してみよう。

4. 他動詞間接受動文の二義性の位相論

図3

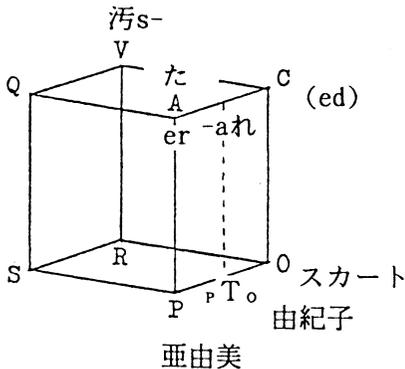


図4

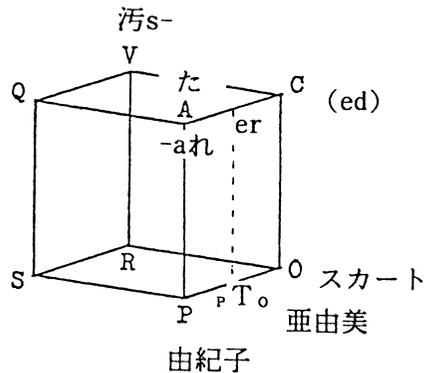


図3は文例(8)がもつ選択的な意味のうち、由紀子のスカートが汚れた場合、図4は亜由美のスカートが汚れた場合に相当する。それぞれスカートに対する実例指定者（現実に

は着用者・所有者など)が P に入っているが、これらを対置語に付加して名詞句〔由紀子のスカート〕〔亜由美のスカート〕を作り、それを述語 ed 〔直接受動者資格述語であり、実際の音形は間接受動者資格述語と同様〕と組ませて $S-Q$ に転送入居させれば、それぞれ「由紀子のスカートが汚された」「亜由美のスカートが汚された」が発することになる。それぞれそういう意味になることを念頭に置いて、今度は P 成分とその相棒たる述語とのペアを見てゆくと、図3では〔由紀子-られ〕であり〔接辞 -a れ は標準化して「られ」と記す〕、図4では〔亜由美-er〕である。前者のられは間接受動者資格述語。後者のerは能動者資格述語であるが、今の場合はやや「再帰的」なニュアンスを帯びている。そのニュアンスは先天的に特殊な変種のerに内在するものではなく、たまたまerがCに近い T_c に座を占めたことによる、後天的・臨時的な性格である。この、位置による同じ述語のニュアンスの差は、られの場合についても言えるから、以下の論議にも注意されたい。

さて今度は、 $P-A$ に位置するペアを見ていこう。図3では〔亜由美-er〕であるが、この性格は図2の際に考察した通りである。資格述語erはCから遠いので、「再帰的」なニュアンスは帯びていない。一方図4では、 $P-A$ に〔由紀子-られ〕が入っている。これは付随的な状況として由紀子が間接受動者になったことを意味するが、この間接受動者ペアの位置を図3の場合と比較されたい。図3では、られの位置は T_c でCに近いから、直接受動者述語edに近いニュアンスを後天的に帯びることが理解されると思う。つまりこの場合の由紀子(-られ)は明らかに図4の場合よりも直接受動者に近いのであり、それ故に直接受動者と同じく、容易に直格語(軸語,「主語」)の座に進出するであろうことが、納得できる。実際、「由紀子のスカートが汚された」よりも「由紀子がスカートを汚された」の方がむしろ自然で、使用頻度も高いであろう。それは移動の直線距離が短いから〔図参照〕であるが、そのことは、間接受動者の方がanimacy とhumanityにおいて直接受動者よりも概して高く、関心の対象になりやすいことを反映している。もし、関心が直接または間接受動者に集中した結果、能動者に関心が向かなくなり、言及に値しないと判断された場合には、その表現は省略されるか、 P に置かれたまま消去される。しかし図3から能動文への発展の過程も一応考えておかねばならない。

図3から亜由美-erが $S-Q$ に転送入居すれば能動文へと発展するが、一般に焦点の当たった資格述語(ここではer)がそうでない資格述語(ここではられ)の音声的実現を抑圧する〔と仮定する〕ので、erが主語と組む述語の位置すなわちQに入る〔これが能動態を起動する要因!〕と、間接受動者資格述語のられは表層から消えなければならない。られが消えると、その相棒(項)である由紀子が、間接受動者であるという身分証明を失ってしまい、役割不明となるので、何らかの文法的地位を身に着けるためには、かねてもっていた、対置語スカートに対する実例指定者という役割に〔修飾語/限定語として〕専念せざるを得ない。こうして「亜由美が由紀子のスカートを汚した」の形が実現する。

一方図4から統語構造への発展過程を考えてみよう。由紀子-られのペアが $S-Q$ に転送されたあと、その後釜に亜由美-er が ($P-A$ の位置対に) 入居することになる、と思われる。 $P_T o$, $A_T c$ といった地位は中途半端で不安定であるから、より安定した8個の頂点のどれかが近くに空いていれば、そこに転送入居するのは自然であろう。

以上述べた過程を経て、図3からの発展も図4からの発展も、ともに $S-Q$ に由紀子-られが入り、 $P-A$ を亜由美-er が占め、スカート-ed および他動詞汚すを共通の位置に収容した、同じ統語構造へと収束するのである。しかし亜由美-er の省略可能性に差が出るが、それはこのペアの起源的な位置 [$P-A$ かどうか] にかかっている。図4の発展に亜由美が不可欠であり、かつ格標示と語順に強い制約を受けることは、亜由美が起源において二重の拘束を受けていること、すなわちスカートの実例指定者であり、かつ動詞の比較的近い項であるということに由来する。対して3図の亜由美にはこの条件はない [図で象徴的に確認されたい!] から、省略も意味的格標示も受け入れるのである。

5. 結語

いわゆる統語法の自律性を主張する人々是一種の宗教信者であるが、言語の意味の構造が樹形図状のものだという保証はない。統語論と意味論を関係づけるには、偏狭な構成素構造主義を一度離れてみる必要がある。本論考はその線に従う一つの試みであった。

参考文献

- [1] Chomsky, Noam(1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht, Foris Publications
- [2] Chomsky, Noam(1986) *Barriers*. Cambridge MA, MIT Press
- [3] Dowty, David(1979) *Word meaning and Montague Grammar*. Dordrecht, Reidel
- [4] Foley, William A. and Van Valin, R. D. Jr.(1984) *Functional Syntax and Universal Grammar*. Cambridge, Cambridge University Press
- [5] 福井直樹(1990) 「統語論におけるバリアー概念について」 『認知科学の発展』 第2巻, pp.57-87, 東京, 講談社
- [6] 田原 薫(1986) 「能動と受動の交差現象を考える-位相論的統語観の見地から」 『言語研究』第90号, pp.27-47, 東京, 日本言語学会
- [7] 田原 薫(1990) 「鼻は象が長い-「が」・「は」の分布と位相論」 『ニダバ』 第19号, pp.1-10, 広島, 西日本言語学会
- [8] 田原 薫(1990) 『機能的普遍統語論とその展開』 (W. A. フォーリー, R. D. ヴァンヴァリン原著 = [4] の翻訳と評論書) 私家版 (適当な出版社から復刻出版予定)。